

Dulcy B. Hiller, Ada Jacobs, and Shirley S. Wood-
ruff, Life Course of Patients Discharged from Two
Nursing Homes, "The Gerontologist", October, 1974.
Part I P. 408~413.

(萩原清子 長野大学)



社会保障こぼれ話

社会政策の新しい路線

(フランス)

1974年5月に登場した新しい政府は、この国が社会的公正と人間性を追求するために、各種の目標をかかげ、その目標を達成するのに必要な社会計画を発表した。新しい社会政策を盛込んだその計画は、長期的な手段を直ちに実行する2つの分野に分れていた。

直ちに着手する手段は、主として、労働者や社会保障給付の受給者を対象とするもので、最低賃金や給付の改善などが企図されていた。すなわち、労働者の最低賃金は1時間当り6.40フランに上げることになっており、この賃率では、平均的な労働時間である週43時間で計算すれば、賃金の月額は約1,200フランということになる。社会保障の給付では、老齢年金の最低額を日額14.25フランから17.26フランに上げることになっており、廃疾、老齢、労働災害に対する年金や退職給付は、1974年1月の水準が約7%上げられることになっていた。また、家族手当も12.2%の上げが示されていた。

長期的な手段は雇用、労働、および生活の諸条件を改善することを企図している。雇用の諸条件では、雇用保障にかんする労使交渉などが含まれている。労働や生活の諸条件では、夜間労働やコンベアベルト作業を次第に少なくすることなどが含まれていた。

これらの各政策以外に、幼稚園を必要とする母親、保護が必要な子供、身体障害者、病院の入院患者などに対する対策も、この社会計画に加えられていた。

ILO, Social and Labour Bulletin, 1/74, pp.1~3.

(平石長久 社会保障研究所)